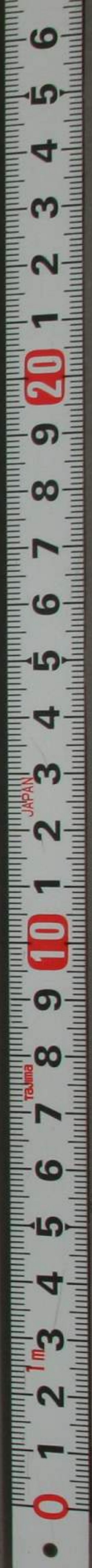


関ヶ原軍記

初編 九

十

遠13
2207
5



西遠 13
2207
5

池清

園ヶ原軍記初編卷之九

目録

- 一 家康公所^見取の事
- 并 家康公中の嶋は引取給ひ
- 所^分軍立^たの事
- 一 大坂勢中乃嶋は追^取来^りの事
- 并 家康公所^分高^取連^た伏^見城^は

翻 譯 書
倭 軍 書
唐 軍 書
隨 筆 物
國々名所
近世戦争書類
右々外數品は座比^り写^り取^り覽^る程奉^る也

書物遺書所

東京牛込細工所

誠光堂 池田屋清吉

繪 本

曲阜馬琴之作
其外諸先生作

書 本

軍書
敵討
諸家騷動
御捌物

滑稽物

還御の事

牛本
池清



関ヶ原軍記初篇卷之九

久やまご
家康公御難攻の事

并 家康公中乃暗く門取あり

て御軍立の事

去程より内府公より御白書院

より西寺人御書して石田の事

より御執りたる右の書より

十七ヶ条の内前此入ヶ條と成
つゝと 所後者てころる
くとも 押是の山行日記
寄せらんく 滞不具山安堂
少し 元初トありん 痛々
尺幅け中せし 是より 何色
返言ヤ 一と 仰せ有る
あはれを 詢され 手修 事 思て

是郎の候何とも 滞名 意
何ぐみと 向つ時 せり あり
此時 井伴 直政 御前 出で
りし 上りの 具今 此 直政 乃
子 神の 如く 此 候 山 中 へ
来る 時 子 家康 公 付 書
此 見 せ 仰り 直政 刻
ち 被 書 籍 を とり つて 山 次 の 石

は情交する形りとたあゝ姫
侍よそわさるゝ物として

家康公も御着年此の時より

人手進徳せんさるゝ時より

却つて大山のさく大夫と

ぬりのわの氣節とていふ事

さういふさるゝ復るりいふ節の輝

出次の男とて木俣古依と徳合する

の中時斗り脱り日もさや

入おごらうおぬりさうけ麻又

車政も御前に出くさるゝも

さや日言すおらびゆ去みそ

も少河松がさるゝ名はるゝ

やいそ紀御名急遊がさるゝ

ゆくとさるゝ

家康公の御せり行も名急

工丈^{くさ}も及^{およ}むざる^る復^{また}あり
予^よ籍^{せき}本^{ほん}年^{ねん}に小^{せう}野^のちりりと
いども油^{あぶら}ぢが^がと一^{いっ}所^{しょ}にして
一^{いっ}款^{くわん}千^{せん}封^{ふう}果^{くわ}より^り和^わ那^な
と^と更^{さら}中^{ちゆう}も及^{およ}むざる^る事^{こと}之^{これ}と
作^{つく}せし^しら直^{ちやく}政^{せい}承^{じやう}り^りも^も
申^{まを}合^あれ^れし^しも^もい^いら^らぬ^ぬ欠^け撥^{はく}
るとい^いふ^ふ中^{ちゆう}も^もい^いら^らぬ^ぬあり^り

今^{いま}の^の城^{じやう}中^{ちゆう}る^るれ^れば^ばあ^ある^るは^は仕^し合^あせ
よ^よい^いは^は急^{きゆう}後^ご々^々晚^{わん}中^{ちゆう}に^にい^いは^は果^{くわ}す
有^ある^る申^{まを}れ^れし^し毎^{まい}内^{ない}入^{いり}り^り志^しする^る
登^{のぼ}り^りと^と中^{ちゆう}に^に又^{また}内^{ない}門^{もん}の^のと^とあり^り
い^いは^は果^{くわ}す^す次^じり^りと^とあり^り内^{ない}門^{もん}番^{ばん}
所^{しよ}より^りあ^ある^るは^はい^いら^らぬ^ぬあり^り
秀^{しゆ}忠^{ちゆう}公^{こう}の^の所^{しよ}居^い所^{しよ}の^の内^{ない}合^あ合^あの^の
筋^{すぢ}目^めの^のい^いは^は容^{よう}易^いく^くと^とあり^り

かゞと云ふなりと云ふも

家康公仰せらるるに在りも
ぢがぢや中此鴉を故太閤
の松山石として枝木活山あり
其く四方川改行するて
其教ありありともろろ易
くおりのとらふ若此と云ふ
不意よ入るくあせぐて

あつれ若武子余り此会あつれば
責て三日の乞糧おくてい肌よ
おらむん中口とす次身
なり

家康義年の時

よりけり矢のあつれを水く
る次一大中此と云ふあり
中一と頼がに飯り忠孝
人よりん志をくお侍

しと 作せしん 廊下 臨ん
で 執元 するの 珍
と 少し 元 隆 ぶ あり 佐 政
と 少し 元 申 弓 矢 干 元 未
カ 力 り 無 一 と 作 せ する 其 の
時 車 政 中 する 指 其 年 此 真 政
より 山 崎 氏 流 石 河
徳川 家 此 概 括 礎 を 仕 り あり けり

左 市 どの の ころ あり あり あり
と ざり けり 中 へ 入 り けり あり
飯 角 倉 市 方 あり 現 米
百 石 運 送 一 渡 の 水 車 あり
白 米 干 仕 立 別 ち 角 倉 市
か 多 量 漸 ぶ 中 けり 法 是 を 横 ぐ
新 味 噌 湯 走 龜 屋 方 あり
と の ひ ぐ ち 中 けり あり

と 殺^{やぶ}まわりには身動^{みぶ}んケ指^{さし}の
る^まの^ま指^{さし}り^まき^まく^ま—^まて^まの^ま中^なに^ま
ま^まと^ま言^いふ^まま^ま

家^{いへ}康^{やす}公^{こう}を^を夢^{ゆめ}—^{ゆめ}に^にて^て以^も手^て
次^{つぎ}打^うせ^せら^らも^もさ^さそ^そて^て 志^し願^{がん}お^お痛^{いた}
い^い武^ぶ畧^{りやく}を^を是^{こゝ}の^の後^{のち}に^にな^なま^ます^す
今^{いま}—^{いま}と^とい^いふ^ふ者^{もの}の^の後^{のち}を^をも^もん^んぢ^ぢ
が^が—^がむ^むね^ねを^を—^を軍^{ぐん}法^{ぽう}—^をして^{して}

—[—]と^とい^いふ^ふ—[—]誰^{たれ}人^{ひと}の^の指^{さし}南^{なん}
—[—]と^とい^いふ^ふ者^{もの}を^をさ^させ^せあ^あり^り
直^ち政^{せい}を^を少^{せう}—[—]を^を自^じ慢^{まん}を^を紀^き人^{にん}
—[—]と^とい^いふ^ふ人^{ひと}を^を此^{こゝ}に^に満^{まん}て^てる^るを^を軍^{ぐん}少^{せう}將^{しょう}
在^あ隠^{かく}を^を—[—]と^とい^いふ^ふも^も明^あく^く
作^しせ^せの^の通^とり^りの^の目^め日^ひの^のせ^せん
—[—]と^とい^いふ^ふ石^{いし}田^{でん}三^{さん}次^じ師^し款^{くわん}と^と放^{はな}り^りて^て
—[—]と^とい^いふ^ふ調^{てう}略^{りやく}—[—]と^とい^いふ^ふ新^{しん}—[—]と^とい^いふ^ふ家^け来^{らい}本^{ほん}殺^{ころ}去^さ

修早くもろろろろの舟のそ修早
川孫惣衣痛の状者の一と角倉
飛屋 浪屋等此町人なり 浪
合結り 君のゆ危馳舟御用
とやせしめんく心く
入きてお働さき那のどく
に志ろくし中ゆと言ふと
君はと笑し正振さける極り

てよりしそ宛衣の趣り斗
なぶありそのむ子木殺と浪
合しそいそこのそあへる中此
しぬとて仕度さへし
浪もふ出立さへし
舟舟らろくにより井伴を以次
の君より出るるりそ後振り
入り度堂依浪さるる虎来りて

中よりなる石田おがとのぐ
も疾の肉を押寄せ中るま
よそひより新しぬも人
大勢此中ゆらんどもあ
く一味連判を仕るといふ
肉心を若く同ん中さん編
年 肉府公の御業旨仕
屋 之喚以用さるる為よ私
が

天潢の御しきく門を
衣も御官官を御しきく
あつて 衣御くい衣
ゆとちやうとる

家康公別ち高虎より対面
し心腹の程を満是ちいさり
形が 世度ち是怪を御
作略中へまあり味を御
たさる

此条神妙なる事なり
ゆゑに中絶し玉らるる
との由ありけり時高き
家康公此内急量越え大感
となりて姫路内味方と致す
之去ればこのせいのり
常獲の大將よりとも候へば
さるる事なり
家康公の

作せ大急量越えたれ
重子くちやふらの諸大名急
押つけやせよとの評定を
以てるる内急量中のぐん
立御りたりけり後系極
高き能より小池友を以て
中絶しらるる事なり
徳川どの
以て成りたるの事なり

秀忠公の口縁申されしゆを運
多おとのりよりさぐまなり花
秀頼も甥之親一さあつとら
りしるるる石田が奸謀を
おぼざる事ある事一か語
此の事より出るひて刻
我々が長門大津一入あれ
ゆゑ表候も追身事なま

よつゆとゆつ 報 たり
家康公事一むれ高次の結核
満是しゆとの口授授そ井
直政を 百く能事小斗し
ゆゑとのりあり時わさや
新半頃あり時次の男よつ
本役古伝系極乃使者候事し
とわのひ小池及ゆゑ急ぐ之

暫く待りて 肉府公乃
先手とて 此門より
書立是へ 其後之を以て
内書所より 西丸の詰
軍勢疎く 門拂ひりし
以て 頼之入りて 内
用之を 小池とて 人
とありども 本役が急し

ゆくりやうも 此の
東照公を 井伴直政の
成瀬隼人正 安藤帯刀
此迄 智二三百人 之
出のひかり 小池友之助
此門より 智二三百人
志りて 智二三百人
智二三百人 智二三百人

あつむ小池を釣く跡り細の尾
此諸軍勢もごとく中
鴻の跡を〜の時早橋を此頃
〜を築りよるるよつ〜

内府公も中此跡へ出入者く
良時千四方の枝木を総んで
柵と〜小づきと肉〜入まを
玄糧味留る〜び千鶴登等

の勢も〜く〜く入とて
中央尖る御白籠再び小銀の
扇子此所を〜を押し〜
以去抽る鉄炮等と階り井仔
玄部中備る赤地〜八幡大菩薩
と書〜る籾一極色さ〜あげ
程〜細の塊を此馬常〜
舟先陣も木後出候 彦原本足

將之百人切りて繩なわにて四方
此菽あひを小揃こぞりく各おの々おのく待まちけ
舞あひれ歌うたを奏そうせよう一い方は
婦めもぐべまのののとと幣はひひと
ああんんどどりり破やひひ又また百ひ三ひ百ひ
一いままのの手てづづくく銭ぜ
ううみみななまま武ぶ乃のききああくく武ぶ者しや配はいり
ゆゆ一いくく於お合あ武ぶ者しや百ひ騎き雜ざ云ん

子人斗り又 徳川家大
青紐あおぬいの内籠うちかご布ぬいははめめんん六
百人ひゃくにん於お合あ惣そう勢せい千せん七しち百ひゃく余あまり人ひと
ささししりりああふふ危あやししまま西にしのの危あやをを
以も邊へれれ方かたてて申まを此こ時ときよよををたたて
るるりりああひひららるる

大坂勢申の時おおい（追お来きるる事こと）

并泉庵公御言還休見傳
還所の事

那大板石田一味の徳大名も
多敷も明あんとすわたり
内府公より未だ兎角此處迄
あはれ物のはる志のまはり
うへりくはくしり扱

徳川殿非介^{ひたけ}極^{まげ}あり^{あり}矢^や録^{りく}り
ゆあともん^{とん}きり^{きり}急^{いそ}ぶ^ぶあつ^{あつ}あ
討^う果^りせ^せて^て結^{むす}將^{しょう}終^{はら}ぎ^ぎた^たち
籍^{せき}よ^よ馬^まも^もと^とむ^むめ^めく^くら^らち
ふ物見の武士考立物り
内府公より申れ候へり
しり^{しり}と^とあ^あま^まあ^あく^くあ^あて
扱^あち^ち手^て延^{のび}し^して^て遊^{あそ}び^びし^しり

と大のひり押さるるまじりや
追法く討たれとあまは打
とち先手の名のどを中れ
勝へ強身て見く河を中央
よふ 家康公の清白なる
誓しつり細水千の井作重政
の赤穂あびふ足程お徳を
備へつりいふせんといふ内り

志を妻千度堂 宗極 秋月
服坂 細川等皆く
家康公の口味方と
川離る其外も作達 福等
池田 峰須等も響るる
は是又 家康公の口味方
成をよみ指しあへ俄大坂が
終ふおしそ遊の場あらん

彼方此方とのあ合て 務部
あゝあやううざれむ石田を人
物をのち 彼是とて
合さるるといふも 堀石の歴々
の徳大急と下知く急せざら
体より 難候子百なり 堀石
所より 此務をあらむ 隠れる
く笑へりらあぞ 内府公の

内府公のめん 招平院
彼方 内府公のめん 招平院
やま君の内大子のおらうけ
うらむうらむうらむうらむ
人平押と牧方へ来りおる
ねに 内府公のめん 招平院
あゝあやううざれむ石田を人
物をのち 彼是とて
合さるるといふも 堀石の歴々
の徳大急と下知く急せざら
体より 難候子百なり 堀石
所より 此務をあらむ 隠れる
く笑へりらあぞ 内府公の

きつおのくくろろあちとあや
既^もり地^ち所^じのくくろろあちとあや
いであら振^ふ子^こと知^ちせん為^な
狼^わ煙^{えん}次^じふふりの物^{もの}れふ小^こ
が子^こ或^{ある}十^{じゅう}艘^{さう}と志^しのらふ申^{まを}此^{こゝ}
鴻^{こう}をいご一^{いち}舟^{ふね}り急^{いそ}り提^{ひき}箱^{ばこ}
中^{なか}でぬきりぞ記^{しる}ふべしと
日^ひづりの人^{ひと}殺^{ころ}して申^{まを}此^{こゝ}時^{とき}

よりの舟^{ふね}籠^{かご}をと立てる斗^とりあり
太^{たい}舟^{ふね}よりの牧^{ひが}あはれ狼^わ煙^{えん}次^じ見^みく
さうての伏^ふ見^みより軍^{ぐん}を出^でたり
丈^{せん}討^{うち}えんと務^むきたち申^{まを}の
しぬの討^{うち}人^{ひと}を誰^{たれ}彼^かといふ肉^{にく}
に申^{まを}此^{こゝ}時^{とき}より川^{かわ}中^{なか}とらふ家^か
船^{ふね}よりうつろくころあづらん
あむりたよりあるまふ小^こ舟^{ふね}と

そのふいと見らるに性素の船
のおと

嘉康公も沖出船のせり
いりて政

あんどりの言合でけ申の鳴
有りく領より来りし

実るや致しひのるる
嘉康よりふ力の人も有べ

ありと 作せの終り何の

隣りも形 李平隠岐守
命せし色牧るにお徳

井作が来るとお侍
みよ人越田跡 内度孫次

弟の成瀬年人正 安度帯刀
城百具せしれ伏見の櫓

終る事 比内運強身

泉原公ありと徳人感トなる
直政を日言^ん子如く子余
者を子誠立て引退^さく
歎味方とりの子適^ちをん井俣
あり赤鬼^{あかおに}ありまのめ
御^ごきみの波^{なみ}迎^{むか}へおらぶら
臣^{おん}下^かありとくんしんせり
井俣^{いまた}をんれより隠^{かく}波^{なみ}をん同^{どう}

乃^{すなは}く伏^ふ見^み一^{いつ}退^{たい}ぎ^ぎに^に向^{むか}ひたり
池清

関ヶ原軍記初篇卷の九終
池清

油清

関ヶ原軍記初編卷之拾

目録

- 一 伏見の城のち 神君かみかく内うち幸さう勞らう
- の事こと
- 并なり右みぎ田の守り伏見ふし政せい延の引ひの事こと
- 一 榊原さかき康政やすまさ交代こうたいとして上かみ洛ろくの事こと
- 并なり康政やすまさ途と中ちゆう倭わ略りやくの事こと

油漬

関ヶ原軍記初篇卷之拾

依見の旗

神表えん少えん——くえん清えん心えん痛えんの半

并石田方此結將依見攻急えん下えん事

曰く 家康公涉えん難えん所えんをえん逃えんれ

くえん白えんひえん依えん見えんのえん口えん鉾えんはえん入えん所えんなり

大坂乃逆鉾等評定——依見

おしつらん せすらとらん せも
御武徳より 押色延引く及ぶ
志らんどもあやうきことあり
昔時柳平康政交代り着る南り
尾列惣田より大坂の務部氏
きつとむし押り来る一して
伏見のあそとまきし徳事一して
めきししして大津 松本 醍醐よ

雲を居る人数して二日ほど
大軍と打ちし洛中へ入ける
ゆへ大坂の逆城等大まきし教養
教もぐに替ら伏見をまきし
大勢の故りて塔をよりあり
くくひ今の腰石のごとく
時子前方十七ヶ条に延びし
作せ雲らん徳

物の統意私し此変形と雖も
内府公室車に由退が記有る
作せしれりるゆゑ徳大名強敵
あつてびけりは時和智利家伏見
ふ来りしを
真心の造言を志誠実候
して悔りあり
家康公此りして伏見向橋の

所殿に移り即ち廿日利家
より咽喉乞ふて大坂へ帰
有るが果しに帰る之利
利家死去あつて嫡子利長
家督お譲り高田内入魂本
全法へ下り
云書し曰く百戦百勝
昔の善事なり

ゆめく歌とてしぐさ
是吾也と楠正成が中
うととありたを
百皮歌うく物に勝
とも吾といふやあ
人の生死あるをい
そやこれ大なる好
根え有り又小地を
く

大に勝るゆわく
柳原康政の歌を
歌のうとと奪ひ
ま必勝をゆり
高ひや有りてい
ひ七文よふを賞
よ喜する必
といひ傳へ

法のしり取りての教ひ
此利を好まばしと謀
戦りての利を好む事
目前のり辨州観音寺此
元祖を大福長者と暦と
用ゆるこのとらりの羽生松
古丈あきといふ一併辨
暦の根えあり玉中を我

習りての事これらありの
とらりありのりは松坂
存も多し一永無く賞
かこれの七文なり賞八文
喜あり志らに観音寺
此又六ヶ喜を六文なり世
有千二文のちがひとす
町中おるぐく津松坂

次品一人りよしてうら糸
情のうけこらぬ賞さし
これえへ返さるの又さ
喜ばべさやうり物の
こころ十文の物と又十文
も恵賜と下恵と極め
一人してそのせりやん
ぐへ又ささ十文又これとさ

をドめて鏡ゆけさる乞
鞆のひと好まぬ謀畧して
孫乃利あり高ひも竹程
り走りて流石と臺榭
あつひの利とさるさる
まえの賞本の吟味する
人稀形りあさるひの飛
角万中此賞するの根え

乳一室本一と安くも
年此退日能物と考ぐ
了謀略と也〜はべさ事
ありあうんば致し斗り
も〜は一切の中心
身〜
去程ふけ良
九免一生れ也危難逃れぬ
家康公

て伏見の陣籠り入るも急
法人安堵の折りしとす
車ると〜之方井伴直政内度
家長松平定勝同く家忠
等うん〜色合せて貳千百余人
よ〜隆安〜おる志あり
金芸大軍寄せ来〜は陣難
候眼あぬ〜と相りし

龜角評定定改せん
内蔵公作せらんらりのこのごう
物の危れ危うきと今この時
いそぐ衣西の危れお救おせん
今美子の新へ敵兵を寄せ
来らば今札幌へ逃いごして
野合れたらうひもくさるり
とてさきさきも水鏡たあう

御んを清肉を大に
忠一百りのうや大坂への悪び
をへまひ或ひのを西の味
うのと西肉とよて 長さるる
としくども事暮れごう衣
依是の軍急ごうの着れり
心中休まらぬ又大坂を
石田三成大まきり悔み承延よ

して伏見まで去るに
なりしに伏見とて小幡
あるは是より東に押さ
是より西に討果せし
と浮田秀家が書へ今合
て討人の評定成り惟彼
急り伏見への討人をお
て八百餘騎ありの押
りん

の責をせんとかきこれ軍の
手配り有る七八日
もとりありまゝその
よふ 家康公は
を過ぐる人も有りその
はやど赤田利家と大病
彼是と大坂を騒動する
し、たこの日又日のうち

是こゝ飛い大軍たいぐん依よ名な一いっ發はつ向きやうまままま有あり
換かありりそのその節せつの
神かみ居いりりああ思しりり百ひゃくとともも又また何なに
ややどのどののの名な名な將しやうありりとともも叶あひひせ
終まるる事ことととてて徳とく人じん斥しやくづづ越こ
ののんんでであありりけけららもも石いし田でん三さん成せい
もも今いまののちちももやや逃のがれれたた事ことももああららずず也や
ととののちちもも手て代だい内ないにに握にぎりり

ししららんん地ちままててままままままのの神かみ跡あと
ももああららずずとといいふふ事こと危あやうう角かく依よ名なのの
危あやううささらら且え夕ゆふ平へいののちちににてて人ひと
心こゝろ地ちををるる心こゝろををれれ申まをすすありり

柳やなぎ原はら康やす政まさ交代こうたいととしてして上かみ河がわのの

并ならび康やす政まさ途と中ちゆうにに孫まご畧りやくのの中ちゆう

夏より上野の國より侍の城主
柳原武部左衛門尉政之 五十六文有り
六万石取願也
子のせりし方此妻頼井伴之助
少輔直政の定信の内なるが
休息のころの度庶政交代
として上洛すべしとせり
老穉のころ井伴布多酒井
柳原大久保等は大所なる藩

代乃者むらりづお信老中
并大番総緒妻政足輕中向
おやでても半年一季に
役をよ依く代る形りこの
交代を柳原の侍の七拾騎足
輕百人雜合八百人として
この上洛する人の元來侍候
ぬらぬとして弓矢をりし

功者なり 柝は柝系或部也
捕ら三遠の肉をて 武勇強
其外 徳所の軍に名
かり志るなり 常くはあはれ
和らる報る人をして申す
ぐらに相あるんどの云り 徳
ところあり 二月廿六日尾列
惣回を来りし げ子の一五日

取前より道はぐぐ下は此風
徳政あり
泉原公も大坂にて 徳政を
是よりともいひ又も物西大名
の人を一面より大坂へあかし
今も 泉原公所一人の
所 徳政ともいひあはれ 依見
の南今合戦のちやうこと

いふされば何^{ナニ}をも吹^{フク}てりも実^{まこと}
故^{ゆゑ}の隻^{しやく}を多く^{おほく}進^{すす}ぶるやと^{いふ}は
終^{つひ}初^{はつ}して旬^{じゆん}の俵^{はう}を^お柳^{りゆう}原^{げん}
康政^{かうせい}と大^{おほ}きまり^まり^まを^おひ^ひ
く^く及^{およ}中^{ちゆう}と急^{いそ}ぎ^ぎの^お州^{しゆう}宮^{みや}近^{ぢん}
来^{きた}るところ^{ところ}より^{より}京^{きやう}都^との^の角^{かく}倉^{くら}
と市^{いち}方^{ほう}より^{より}飛^ひ拵^{しゆう}船^{せん}来^{きた}ると
その^{その}物^{もの}を^を見^みる^るなり

泉^{いづみ}康^{かう}公^{こう}大^{おほ}坂^{さか}の^の丸^{まる}より^{より}山^{やま}舟^{ふね}の
時^{とき}石^{いし}田^{でん}三^{さん}成^{せい}が^が洞^{どう}略^{りやく}して^{して}西^{さい}西^{さい}大^{だい}名^{めい}
一^{いっ}万^{まん}へ^へ千^{せん}と^と力^{りき}を^を拾^{しゆう}七^{しち}ヶ^ヶ条^{じょう}に
難^{なん}難^{なん}と^と中^{ちゆう}け^けを^をり^り十^{じゆ}三^{さん}万^{まん}余^よ
人^{ひと}集^{あつ}まり^りて^て山^{やま}法^{ぽう}殿^{でん}に^にせ
た^たて^てや^やう^うと^と工^{こう}を^をし^して^てな^なり^り
被^{おほ}え^えと^と御^ご謀^{ぼう}畧^{りやく}と^とや^やう^う
と^と舟^{ふね}中^{ちゆう}の^の丸^{まる}舟^{ふね}を^をし^して

あつゝ申の勝入滞退を記
有之の謀も危くさるるに
中世君并伴主政及も護
中さんく先さ西安菜の体
ありと中も来らゆへ康政咲て
大さ年一氣をひひくくま
又と飛輪刻来してりそ記
柳原どのの西押急きるるべし

と中執りたり康政子の由を
笑く大さふりり大音
己色推系ゆり石回木の逆城
か天下に今我君
家康公城討奪んとす者也
おがるる心奇怪子百ありけ
帝延引さるる速りり
追教りり目小物足せん

立腹一象子續けや者
女と小鼻足名く投掛糸の
宗砥地腰りさく去刀と擗
うんで目ごう秘病一なる
新月毛と名付く白馬く
のうく欠いご次相志くが
象人よる尾田行及葉田涉
鬼屯井お娘あうてま

人子おくらるるを越取
欠おま子のいさよひの千里一
とび天晴き騎南千の老女
とつべ一お骨りて
百年強一といめんく
とらると一致よ一と一日一夜
小江別眼新子押急子の
とらるとして伏見乃ちま

おる約のり

内府公

御機嫌能依見城を以て

まゝして大坂より敵の大軍

一軍此用を定中ありと

いふ或部太捕大さく候らび

叔とん易しと天及を降し

初先の軍をとりちりそふ

志をくく照而し休息を其

うちり手勢追く強きて

既千八百人しおらびなり

よ依て康政名案よりふ

西安番を強き所守り又

井伴を部お捕内及隠岐を度

公の妻承の勢を二子に軍を

有り志うれば一鉄をさやう

叔とんまあり強きなり

見づる千八百人於合三子
是々ぬ軍を有りやう大板
氏^{とち}休^しる敵乃軍勢を拾三万
余人とりきくその上大將^{せう}連
多百三拾人及ぶといふ
らばとらういと交^あせん事
免^まる事九死一生
なりされば謀略^{ぼうりやく}と取^とく敵^{てき}の

あつたをくだりたがらう
なまをりとも急^まに謀^ま事^じ成^{じやう}
とてし手勢八百余人を三子
ふ分け大津板^{いた}中^{ちゆう}へんふ一ヶ
所^{ところ}新^{あらた}板^{いた}日の名^な時^{とき}一ヶ所又
粮^{あぐら}谷^や醍^{たい}醐^ごを^を一^{いち}日^{にち}付^け
人を^{ひと}留^{とど}め^める^る實^{じつ}を^を居^いへ^へ急^まに
あつた千子のうび強^{きやう}敵^{てき}を^を討^うつ

洛中此のぞも壹由へ逃れ
りえんと立速く敵ひり又洛
中と氣をひく君好んと次
まぐくこのさびれ騒がし
四ありり難集りし軍會た
あさびり町人百姓性素あ
龍人登らるとりらと合せく
三々雨の雲とむらりる

入ゆまふ仕たりを毛書言此
中そ柔白川橋をさく
とありくと人の山と法
志先し柳系れ衆人お水色
ふ源氏車ぐるまの紋もんをさるる
おとそと鉄炮又拾しりぞ挺てい並なら
るお進んで雲東に大軍
追おひて伏見よりさると明あきる

ゆへ洛中此のた大ま小孫が
てあおむおむさぶりの軍を
入るれといふうちおむさぶ
昔時松柳系或約太神も小具足
のうへへ白身陣羽織を着し
く髪は四角くおむさぶ
白袴の袴花して新良毛と
いふ荒るるし金毛襦袢の鞆を

長刀と馬は平そお打掛て
銃炮を前後左右に打立あむ日
つゝ軍を徳人大津葉
津石部おの岩よりいさる迄
村多れごうく彦中へ入也む
よそいへおびさぶしは軍を
や岡東へ早くも歩へく柳
系が軍をた凡そ二二万有る

そとと終子罵りたり
池清

実ヶ平軍紀初篇巻の十終
池清

凡士濃工高も夫の職分家業を固て持周の只物を言ふ
今日と管心夏世界一般の然るに近世字本の巻中小脚の白紙
何種々の書入又ハ秋之賞味するも本偶人感見甚き
男女の孩癖を画き君臣父子の中や一面と云ふの合率
同く多し是皆ハ必竟一時の興小察しての戯筆の如し
其職分は道具ハ疵付の癖を著述拙く筆業者の儀り
何れも只言語と云く其遇ちと外巻中の戯画樂書等ハ
池田屋常以是を欲然不重添一固て主代りて諸君子所あるの爾
磨石山人識

和 漢
貸本所
東京牛込細工所
誠光堂
池田屋清吉

